

農学部キャンパスの野鳥 (1988-1989) (1)

誌名	茨城大学農学部学術報告
ISSN	04451694
著者名	堤,将和 松沢,安夫
発行元	茨城大学農学部
巻/号	37号
掲載ページ	p. 103-114
発行年月	1990年2月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



農学部キャンパスの野鳥 (1988~1989)

第1報 生息環境と野鳥の種類

堤 将和・松沢安夫

茨城大学農学部の施設整備は着々と進行し、来年度はいよいよ本館建設が始まる予定である。その概要は、現乙地区に教育、研究、事務などに関する建物が集中しアカデミック・ゾーンとなり、現甲地区には体育館、課外活動施設、運動場などが整備されてアクティビティ・ゾーンとなる、ということである。したがって、実際に工事が始まると、現在の建物はすべて取り壊されるとともに、樹木の伐採、移植が行われる。また圃場も移動を余儀なくされ、農学部キャンパスは大きな変貌をとげることになる。このような環境変化は、現在の環境に順応し、依存して生活する野鳥に対しても少なからず影響を与える

ものである。そこで著者らは、この環境変化による野鳥の生態変化を明らかにするため、現在の農学部キャンパスに生息する野鳥の調査を前以って行うことにした。特に本年度は現農学部キャンパスが従来の姿で残る最後の年でもある。このような意味において、本調査結果は施設整備による環境変化を知るうえで貴重な基礎資料となるので、ここに整理して報告するものである。

〔調査方法〕

1) 調査区域の概要

図1に記載しているように、今回調査した区域は農学

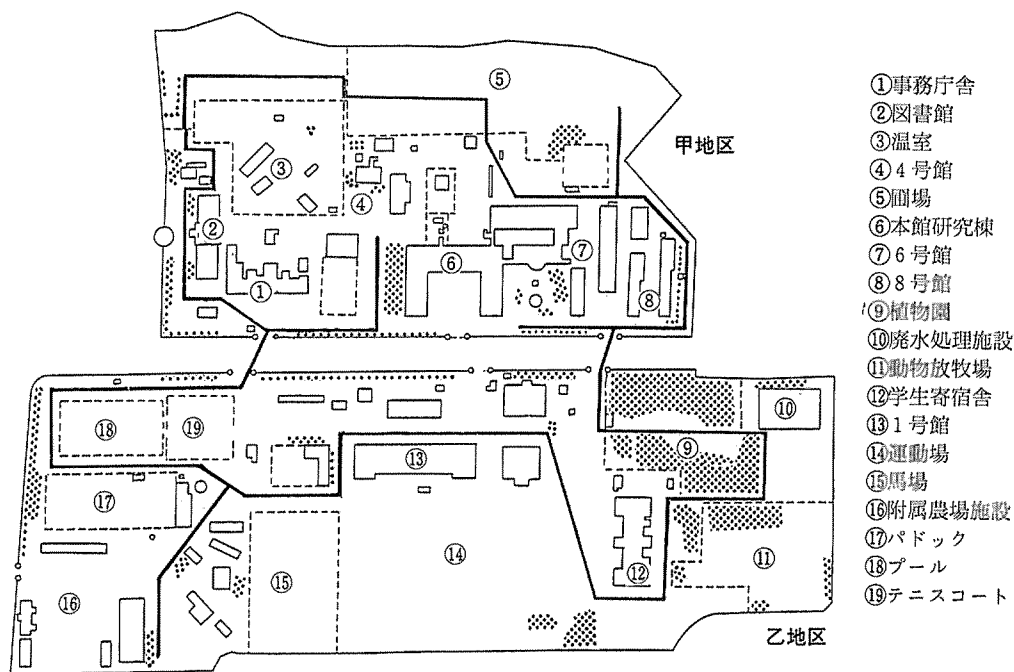


図1 調査コースと樹木の分布状況

部キャンパスの甲地区 (43,763m²) と乙地区 (71,440m²) である。

甲地区には各研究棟, 事務庁舎, 図書館, 温室, 職員宿舎などがあり, 本館研究棟, 4号館, 図書館が二階建, 他はすべて平屋で, 主要建物の総面積は約6,200m²である。本館横にはアオギリ, シイ, クログネモチ, エンジュ, タイサンボク, ユリノキ, シロダモ, アメリカフウ, カクレミノ, スズカケノキ, スギ, マツ, トベラ, ナラ, ビラカンサなどの樹木がある。図書館裏にはマツ, アオギリ, イチョウ, スギ, ツゲ, ヒマラヤスギなどが, 4号館周辺にはヒノキ, アオギリ, エノキなどが, 本館と6号館の間の庭にはカキ, ツガ, スズカケノキ, イチョウ, マツ, カエデなどが多い。その他, アサガオ圃場に隣接してクリ林 (25本) がある。職員宿舎の周辺にはカキ, ビワ, ネズミモチ, ムクゲ, マサキなどの灌木がある。圃場は牧草や稲, 野菜類が主で, 一部トウモロコシなど背の高い作物も栽培されている。

乙地区には研究棟, 講義棟, 学生寄宿舍, 附属農場施設などがあり, 2号館, 学生寄宿舍は二階建, 他の建物はすべて平屋で, 主要建物の総面積は約4,700m²である。馬場は運動場に接し, この附近は大きく開けた空地になっている。附属農場施設の中には家畜のパドック, これに接してテニスコート, 壊れた競泳用のプールがあり, これらはサクラやヒマラヤスギ, ヒノキ, マツ, カエデなどで取り囲まれている。また, 馬房の周辺にはスズカケノキ, ポプラ, ハルニレ, ヒマラヤスギなどがあ。植物園から動物放牧場, 学生寄宿舍横にかけては最も樹木が多い地域となっている。植物園はヒノキやスギ, タケ林で周辺を囲まれ, その中にスダジイ, イチョウ, ウメ, モチノキ, キンモクセイ, ヒマラヤスギ, カエデ, ヒバ, サクラ, ツゲ, マキ, カキなどの樹木が散在し, 中心部は上空が望める空地となっている。動物放牧場には現在山羊が放牧され, ヒノキ, エノキ, カエデ, クリ, ウメなどの樹木があり, 日陰を提供している。学生寄宿舍横にはエノキ, オニグルミ, サクラ, マツ, クリなどがある。時折下草が刈られるので樹木の下は草地となっている。

なお甲地区と乙地区との間に県道がある。県道は阿見町の主要道路 (歩道付, 片側1車線) でもあり, 交通量も多い。歩道にはヒラドツツジ, ドウダンツツジ, シャリンバイ, アベリヤ, レンギョウ, クチナシ, ヒュウガミズキなどが植えられ, また, クスノキ, サクラの幼木が植えられ並木となっている。その両側のキャンパス内にはヒマラヤスギ, サクラ, サンゴジュ, カエデ, ヒノキ, シノブヒバなどが植えられている。

2) 観察道具

野鳥の観察, 識別は主に双眼鏡 (ニコン9×30) で行ったが, 必要に応じて望遠鏡 (コーワ25×60) も使用した。なお, 「鳥630図鑑」¹⁾ を携帯し, 野鳥識別のための参考書とした。

3) 調査方法

農学部キャンパス (甲と乙地区) の野鳥の生息調査は, 草原の野鳥の生息調査において多用されるベルト・トランセクト・センサス法²⁾ に準じて行った。つまり, 一定の調査コース (図1) を決め, その両側に出現する野鳥の種類と数を地図上に記入し, 集計した。この調査は毎月最低2回行った (以後この調査をBT調査とする)。また, 昼休みの散策や登下校時などで観察された野鳥もその都度地図上に記入し, 集計した (以後この調査を随時調査とする)。その結果, 今回の調査回数は, BT調査を28回, 随時調査は101回で, 合計129回となった。調査は1988年10月から1989年9月まで行った。調査日と調査時間は一定していないが, BT調査はおおむね日曜日と祝祭日の午前10時頃から12時頃までの間に行い, 調査時間は約1時間程度であった。

〔調査結果ならびに考察〕

1) 農学部キャンパスで確認された野鳥

今回の調査において農学部キャンパスで確認された野鳥は, 表1に記載した17科28種であった。1回のBT調査で, 通常数羽は確認できる野鳥としてスズメ, ヒヨドリ, ムクドリ, ツグミ, カシラダカなどがあり, コジュケイ, カッコウ, ホトトギス, キセキレイ, アカハラ, シロハラ, ウグイス, ホオジロ, アオジなどは出現しても1~2

表1 農学部キャンパスの野鳥

分類・和名	学名, 英名
サギ科	
コサギ	<i>Egretta garzetta</i> , Little Egret
キジ科	
コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i> , Chinese Bamboo Partridge
ハト科	
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i> , Eastern Turtle Dove
カッコウ科	
カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> , European Cuckoo
ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i> , Little Cuckoo
ツバメ科	
ツバメ	<i>Hirundo rustica</i> , House (Barn) Swallow
セキレイ科	
キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i> , Grey Wagtail
ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i> , Pied (White) Wagtail
ヒヨドリ科	
ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i> , Brown-eared Bulbul
モズ科	
モズ	<i>Lanius bucephalus</i> , Bull-headed Shrike
ヒタキ科	
ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i> , Daurian Redstart
ウグイス	<i>Cettia diphone</i> , Japanese Bush Warbler
アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i> , Brown Thrush
シロハラ	<i>Turdus pallidus</i> , Pale Thrush
ツグミ	<i>Turdus naumanni</i> , Dusky Thrush
エナガ科	
エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i> , Long-tailed Tit
シジュウカラ科	
シジュウカラ	<i>Parus major</i> , Great Tit
メジロ科	
メジロ	<i>Zosterops japonicus</i> , Japanese White-eye
ホオジロ科	
ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i> , Siberian Meadow Bunting
カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i> , Rustic Bunting
アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i> , Black-faced Bunting
アトリ科	
カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i> , Oriental Greenfinch
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i> , Hawfinch
ハタオリドリ科	
スズメ	<i>Passer montanus</i> , Tree Sparrow

ムクドリ科	
ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i> , Grey Starling
カラス科	
オナガ	<i>Cyanopica cyana</i> , Azure-winged Magpie
ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i> , Carrion Crow
ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i> , Jungle Crow

※野鳥の和名・学名・英名は文献1)の記載に従った。

羽程度であった。

野鳥の種類は、植物園から動物放牧場にかけて多く、特にカシラダカ、メジロ、コジュケイはこの地域で確認された。農学部キャンパスにはモズとジョウビタキがそれぞれ3～4羽いるようであるが、これらは職員宿舎の周辺、本館と6号館の間の庭、クリ林の近く、植物園から動物放牧場付近をテリトリーとしていた。またこれらの2種の野鳥のテリトリーは重なっていた。キセキレイは8号館の北側から廃水処理施設付近で1羽見られ、この地域をテリトリーとしているようだった。農学部キャンパスで見られた野鳥の中で、テリトリー性をもつ鳥としては、モズやジョウビタキ、キセキレイの他に、ウグイス、エナガ、ホオジロなどがある。これらの野鳥のテリトリー性の内容はそれぞれ異なっているので、一括して論ずることはできないが、一定面積での生息数を制限する機能はもっているため、農学部キャンパス内で多くの出現数を期待するのは難しいと思われる。ムクドリは甲、乙地区のやや開けた所に多く、群れで見られることが多かった。ヒヨドリは通常植物園の暗い所(樹木内やタケ林など)に多く生息しているが、曇天や雨天の日にはキャンパス内の樹木でもよく見られた。カラス類としてはハシボソガラス、ハシブトガラスを圃場のゴミ捨場付近でよくみかけたが、オナガはキャンパス内の樹木を飛び回っていた。ツグミは圃場、動物放牧場、附属農場施設のパドックで多く観察された。スズメは建物の周辺に多く、また静かな所より人の集まる所に多かった。1989年9月23日昼(晴れ)、BT調査コース内(1号館前)で、弱っているカッコウ(亜成鳥)1羽を捕獲した。練餌[キャットフード(缶詰)、蜂蜜、総合ビタミン剤の混

合物]、砂糖水、水を強制的に投与して飼育した。9月27日朝(晴れ)、元気な様子であったので放鳥した。

なお、農学部キャンパスから直線距離で約9kmのところに洞峰公園がある。洞峰公園はつくば市の南部に位置し、その面積は20ha、公園の中には洞峰沼(3.2ha)がある。また、洞峰公園はいくつかの研究機関敷地や赤塚公園(8.6ha)に隣接しているため、都市部の緑地としては豊富な自然が残されている。したがって、農学部キャンパスと洞峰公園とを単純に比較することはできないが、野鳥の生息環境としては農学部キャンパスに類似している面もあるので、参考のために洞峰公園で確認された野鳥を表2に示した。なお、この調査結果は、1985年6月から1988年12月までの間に行われた日本野鳥の会茨城支部の月例探鳥会記録³⁾をまとめたものである。ここで確認された野鳥の種類は、農学部キャンパスで未確認の野鳥を今後予測する上で大いに役立つものと思われる。

表2から明らかなように、洞峰公園で確認された野鳥は28科68種である。この中には農学部では見られない沼や葦原の野鳥も含まれているため、これらの水辺に多い野鳥を除くと23科52種となるが、それでも農学部キャンパスで見られる野鳥より6科24種多いことになる。例えば農学部キャンパスでの調査において、タカ科やハヤブサ科の野鳥が全く確認されなかった。その理由として、これらの野鳥は比較的高い上空を通過する際に確認されることが多いので、発見するチャンスに恵まれなかった事があげられる。洞峰公園ではタカ科やハヤブサ科の野鳥5種が確認されているため、農学部キャンパスでも今後これらの野鳥を発見できる機会はあると思われる。また、コゲラ、ヒバリ、セグロセキレイ、ビンズイ、マヒ

表2 洞峰公園の野鳥

分類・和名	学名, 英名
カイツブリ科	
カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i> , Little Grebe
サギ科	
アマサギ	<i>Egretta ibis</i> , Cattle Egret
ダイサギ	<i>Ardea alba</i> , Great Egret
◆コサギ	<i>Egretta garzetta</i> , Little Egret
ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i> , Black-crowned Night Heron
ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i> , Chinese Little Bittern
タカ科	
オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i> , Northern Goshawk
サシバ	<i>Butastur indicus</i> , Grey-faced Buzzard Eagle
ノスリ	<i>Buteo buteo</i> , Common Buzzard
ハヤブサ科	
チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus</i> , Common Kestrel
ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> , Peregrine Falcon
カモ科	
コハクチョウ	<i>Cygnus bewickii</i> , Bewick's Swan
ヨシガモ	<i>Anas falcata</i> , Falcated Duck
コガモ	<i>Anas crecca</i> , Common Teal
カルガモ	<i>Anas poecilorhyncha</i> , Spot-billed Duck
マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i> , Mallard
ハシビロガモ	<i>Anas clypeata</i> , Common Shoveller
オナガガモ	<i>Anas acuta</i> , Pintail
ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i> , European Pochard
キジ科	
キジ	<i>Phasianus versicolor</i> , Japanese (Green) Pheasant
◆コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica</i> , Chinese Bamboo Partridge
クイナ科	
バン	<i>Gallinula chloropus</i> , Moorhen
チドリ科	
コチドリ	<i>Charadrius dubius</i> , Little Ringed Plover
タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i> , Lapwing
シギ科	
イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i> , Common Sandpiper
カモメ科	
コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i> , Little Tern
ハト科	
◆キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i> , Eastern Turtle Dove

カッコウ科	
◆カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> , European Cuckoo
◆ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i> , Little Cuckoo
アマツバメ科	
アマツバメ	<i>Apus pacificus</i> , Northern White-rumped Swift
キツツキ科	
アリスイ	<i>Jynx torquilla</i> , Wryneck
コゲラ	<i>Picoides kizuki</i> , Japanese Pygmy Woodpecker
ヒバリ科	
ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i> , Skylark
ツバメ科	
◆ツバメ	<i>Hirundo rustica</i> , House (Barn) Swallow
セキレイ科	
◆ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i> , Pied (White) Wagtail
セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i> , Japanese Pied Wagtail
ピンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i> , Indian Tree Pipit
ヒヨドリ科	
◆ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i> , Brown-eared Bulbul
モズ科	
◆モズ	<i>Lanius bucephalus</i> , Bull-headed Shrike
ヒタキ科	
◆ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus</i> , Daurian Redstart
トラツグミ	<i>Zoothera dauma</i> , White's Thrush
◆アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i> , Brown Thrush
◆シロハラ	<i>Turdus pallidus</i> , Pale Thrush
◆ツグミ	<i>Turdus naumanni</i> , Dusky Thrush
◆ウグイス	<i>Cettia diphone</i> , Japanese Bush Warbler
ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i> , Short-tailed Bush Warbler
オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i> , Oriental Great Reed Warbler
センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i> , Eastern Crowned Willow Warbler
キクイタダキ	<i>Regulus regulus</i> , Goldcrest
セッカ	<i>Cisticola juncidis</i> , Fan-tailed Warbler
エナガ科	
◆エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i> , Long-tailed Tit
シジュウカラ科	
◆シジュウカラ	<i>Parus major</i> , Great Tit
メジロ科	
◆メジロ	<i>Zosterops japonicus</i> , Japanese White-eye
ホオジロ科	
◆ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i> , Siberian Meadow Bunting
◆カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i> , Rustic Bunting

◆アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i> , Black-faced Bunting
オオジュリン	<i>Emberiza schoeniclus</i> , Reed Bunting
アトリ科	
◆カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i> , Oriental Greenfinch
マヒワ	<i>Carduelis spinus</i> , Siskin
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i> , Long-tailed Rose Finch
アトリ	<i>Fringilla montifringilla</i> , Brambling
◆シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i> , Hawfinch
ハタオリドリ科	
◆スズメ	<i>Passer montanus</i> , Tree Sparrow
ムクドリ科	
◆ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i> , Grey Starling
カラス科	
カケス	<i>Garrulus glandarius</i> , Jay
◆オナガ	<i>Cyanopica cyana</i> , Azure-winged Magpie
◆ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i> , Carrion Crow
◆ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i> , Jungle Crow

◆：農学部キャンパスでも確認された野鳥

ワ、アトリなども農学部キャンパスで出現が期待できる野鳥である。

※〔服部（日本野鳥の会茨城支部）は、洞峰公園で確認された野鳥は過去5年間で100種以上になると報告している⁴⁾。]

2) 農学部キャンパスの月別野鳥分布

野鳥の中には年間を通して確認できる野鳥（留鳥）もいるが、渡り鳥として夏鳥あるいは冬鳥もいる。したがって、農学部キャンパスで確認された野鳥を月別にまとめてみた。農学部キャンパスでの場合、野鳥の種類は夏期よりも冬期に多く、最も多く見られた月は2月であった（表3）。

表3から明らかなように、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの8種は年間を通して農学部キャンパスで見ることができた。なお、コサギ、コジュケイ、キセキレイ、モズ、ウグイス、エナガ、シジュウカラ、ホオジロ、カワラヒワのような野鳥は本来留鳥でもあるので、未確認の月があるのは調査員の不足や調査時間の偏りな

どに原因があると思われる。また、モズやショウビタキなどは強いテリトリー性をもつため、狭い地域では生息数が限られる。このためにこれらの鳥との出会いの頻度は当然少なくなり、未確認の月がでる原因の一つと考えられる。

代表的な渡り鳥であるツバメ（夏鳥）の初認は4月18日、終認は9月15日であった。冬鳥であるカシラガカの初認は12月11日、終認は4月25日であった。ツグミの場合は11月6日から5月2日、ジョウビタキの場合は10月10日から4月12日であった。

3) ヒヨドリ、スズメ、ムクドリの月別分布

ヒヨドリ、スズメ、ムクドリは農学部キャンパスにおいていつでも見ることができる。しかしBT調査の結果を月別に集計すると、ヒヨドリ、ムクドリではある時期に羽数が増加した（図2）。なお、図2の結果は月2回のBT調査の合計羽数で示したもので、月3回BT調査を行った場合は合計羽数の2/3をその月の合計羽数として示した。

図2から明らかなように、ヒヨドリは1月から4月に

表 3 農学部キャンパスの月別野鳥分布

和名	年月	1988			1989								
		10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
コサギ		○			○	○			○		○		
コジュケイ											○	○	
キジバト		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カッコウ ホトトギス										○	○		○
ツバメ								○	○	○	○	○	○
キセキレイ ハクセキレイ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒヨドリ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ			○	○	○	○							
ジョウビタキ アカハラ シロハラ ツグミ ウグイス		○	○	○	○	○	○	○					○
エナガ					○	○	○						○
シジュウカラ						○	○	○	○	○	○	○	○
メジロ				○	○	○							
ホオジロ カシラダカ アオジ					○	○	○	○					
カワラヒワ シメ					○	○	○	○	○	○	○	○	
スズメ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムクドリ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オナガ ハシボソガラス ハシブトガラス		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
月別出現種の総数		11	14	18	21	23	18	16	15	14	13	14	11

○：野鳥が確認された月を示す

かけ急増し、5月に急減した。夏期は比較的少なく、秋から冬にかけて徐々に増加の傾向を示した。本来ヒヨドリは夏になると森林のある山地に移動してそこで繁殖し、冬になると平地部に移って越冬する典型的な漂鳥であったが、最近夏でも平地部で営巣・繁殖し留鳥化している⁹⁾。農学部キャンパスのヒヨドリは1月から4月にか

け多数生息し、5月以降急に少なくなることから、漂鳥としての生活パターンを示しているが、少数ながら夏に繁殖していることから、ヒヨドリの留鳥化は農学部キャンパスでも着実に進んでいるものと思われる。なお、5月以降農学部キャンパスから外部に移動したとみられるヒヨドリの行方については、いまのところはっきりしな

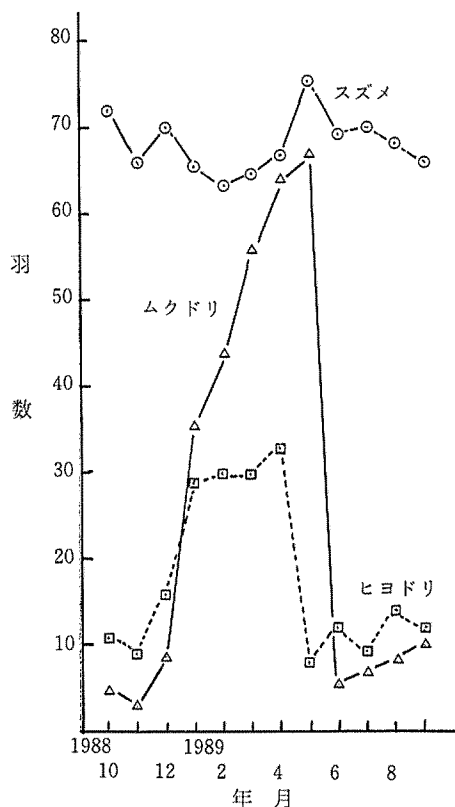


図2 ヒヨドリ・スズメ・ムクドリの月別分布

い。今後の検討課題の一つであろう。

ムクドリは12月頃から増加の傾向を示し、3月から5月にかけて最大羽数となり、6月には急減した。ムクドリの場合、繁殖期は抱卵、抱雛、給餌のため比較的狭い行動圏で巣単位の生活となるが、繁殖期が過ぎれば群れの形成が行なわれる。昼間の採餌中の群れは小群であるが、日没時にはねぐらへ移動し、何千、何万という大群となることも珍しくない^{6),7)}。農学部キャンパス近くでは洞峰公園が有名で、公園内のある限られた場所に集団ねぐらがみられる。このようなことから繁殖期終了後の6月下旬頃に農学部キャンパスから多くのムクドリが姿を消す原因の一つとして、周辺地域での群れの形成ならびに洞峰公園などの集団ねぐらへの移動が考えられる。また、農学部キャンパス（甲、乙地区）内にはムクドリの餌となるものが少ないので、周辺地域の果樹園などへの移動

も考えられ、気になるところである。

ヒヨドリやムクドリの月別羽数の推移は、その年の気象や餌となる木の実などの状況によっても影響されるので、月別分布調査は今後も続け、この度の調査結果が今年度だけの特異的な現象かどうかを明らかにしたいと思っている。

なお、1989年1月9日朝（小雨）の随時調査で、約120羽以上のヒヨドリが職員宿舎と4号館前のネズミモチに群がっていた。ネズミモチの実が食べ尽くされた午後には、ヒヨドリの姿はみられなかったことから、餌を求めて移動している群が一時的に留まったものと思われる。また、同年9月13日朝（曇り）の随時調査で約50羽以上のムクドリの群れが、同年9月27日朝（曇り）には約70羽以上のムクドリの群れが温室・4号館付近で観察された。この場合も一時的な群れの通過と思われる。

農学部キャンパスのスズメは年間を通してある範囲の羽数に保たれていた。スズメは比較的狭い範囲で一生涯を過ごす定住性の強い鳥として知られ、定住場所としては人為環境に適応する習性から、通常、人家の多い地域が選ばれる。しかし、幼鳥は必ずしも生まれた場所に留まらず、新たな定住場所を探す。ときには予想外に遠方まで移動することが知られている⁸⁾⁹⁾。農学部キャンパスでもスズメは春から夏にかけて繁殖しているため、繁殖期終了直後の羽数は当然増加するはずであるが、農学部キャンパス周辺は住宅地でもあり、適当に開けた田畑もあるので、幼鳥の移動は比較的速やかに行われるであろう。また、このことが農学部キャンパス内のスズメの羽数をほぼ一定にしている要因かもしれない。

なお、前述のように、スズメは人為環境に適応して生活する鳥であるから、将来農学部キャンパスが大きく変わった時に、最初に影響を受ける野鳥となるかもしれないので、今後も調査を続けていきたいと思っている。

☆ ☆ ☆

野鳥の生態は地形や植生に大きく左右されるし、気象の変化に対しても敏感である。したがって、地域の野鳥の生態を明らかにするためには、その地域の植物の分布状況や昆虫の動態、気象の変化など長期に渡って調査し、

総合的に判断することが重要である。農学部において、一年間を通して野鳥の調査が行われたのはおそらく今回が初めてであろうが、将来は有志の協力を得て、農学部全体（甲、乙地区や農場地区）の野鳥の生態を明らかにしていきたいと思っている。

農学部は近年中に新生することになっている。素晴らしい建物、見事に造園された庭園は茨城大学に奉職する者として待望するものではあるが、四季折々の花もみられない、蝶や蜂が飛び交う姿も少なく、特定の野鳥の声のみがキャンパス内にこだまするようでは、生き生きとした農学部とは言えないと思う。自然を対象とした教育・研究は農学部が特に得意とする分野である。《これを農学部のキャンパス》といわれるようなキャンパスを実現したいものである。

学び舎の 夢を育む 四季の風

〔要 約〕

農学部キャンパス（甲地区と乙地区）に生息する野鳥の調査を行った（1988～1989）。

1) 生息環境の概要

農学部キャンパスは県道によって甲地区と乙地区に分割されている（図1）。

甲地区の面積は43,763m²、主な建物の建面積は約6,200m²である。建物の回りにはいろいろな樹木が植えられている。代表的な樹木はアオギリ、シイ、クロガネモチ、エンジュ、タイサンボク、ユリノキ、シロダモ、アメリカフウ、カクレミノ、スズカケノキ、スギ、マツ、トベラ、ピラカンサ、イチョウ、ヒマヤラスギ、ツゲ、エノキ、ツガ、カキ、ビワ、ムクゲ、マサキなどである。圃場には種々の野菜類や牧草類が栽培されている。

乙地区の面積は71,440m²、主な建物の建面積は4,700m²である。学生寄宿舎の近くに動物放牧場や植物園があり、サクラ、ヒマラヤスギ、ヒノキ、カキ、カエデ、スダジイ、イチョウ、ウメ、モチノキ、キンモクセイ、ヒバ、ツゲ、マキ、エノキ、クリ、オニグルミ、サンゴジュなど多種多様な樹木が植えられている。運動場や馬場も乙地区にある。

2) 調査は双眼鏡と望遠鏡を用い、ベルト・トランセクト・センサス法に準じて行った。調査はベルト・トランセクトで28回、随時調査101回、合計129回となった。

3) 農学部キャンパスで確認された野鳥は17科28種（表1）であった。なお洞峰公園で確認された野鳥（1985～1988）28科68種（表2）を記載し、今後農学部キャンパスで確認できそうな野鳥を予測した。

4) 農学部キャンパスの野鳥の月別分布をまとめてみた。キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラスの8種は年間を通して確認することができた。シジュウカラ、ホオジロ、カワラヒワ、モズなどは本来留鳥であるが、農学部キャンパスでは年間を通して確認することはできなかった（表3）。

5) ヒヨドリ、スズメ、ムクドリの生息羽数の月別推移を調査した。ヒヨドリは1月から4月にかけて急増し、5月に急減した。ムクドリは12月頃より増加の傾向を示し、3月から5月にかけて最大羽数となり、6月に急減した。スズメは年間を通して大きく増減することはなかった。

〔文 献〕

- 1) 財団法人鳥類保護連盟編：「鳥650図鑑」 1989 財団法人鳥類保護連盟
- 2) 羽田健三監修：野鳥の生態と観察（II-5、草原の鳥の調べ方 p 92 中村登流） 1975 筑地書館
- 3) 日本野鳥の会茨城支部編：支部報“ひばり”（洞峰公園探鳥会の記録）147（1985）～168（1988）
- 4) 学園都市の自然と親しむ会編：洞峰公園自然観察ガイド（洞峰公園の野鳥 p 4 服部浩之） 1988
- 5) 都市鳥研究会編：都市に生きる野鳥の生態（C-1-1、ヒヨドリの越夏と都市への適応 p 17 川内博） 1988 都市鳥研究会
- 6) 羽田健三監修：野鳥の生態と観察（I-3、いろいろの地域群 p 44 小泉光弘） 1975 筑地書館
- 7) 黒田長久：アニメ No 103 p 37 1981 朝平凡社

- 8) 黒田長久(岡田 要監修)：鳥類の研究(II 種各個 生態 p 19) 1969 新思潮社
- 9) 佐野昌男：雪国のスズメ(第5章 スズメの行動圏 p 153) 1974 誠文堂新光社

Wild Birds Observed in the Campus of the Faculty of Agriculture, Ibaraki University

I . Habitat environment and species of the wild birds in the campus

MASAKAZU TSUTSUMI and YASUO MATSUZAWA

The census of the wild birds which inhabit the campus has been done from October, 1988 to September, 1989. The results were as follows:

1) Outline of the habitat environment

The campus is divided into two areas, Kou-chiku and Otsu-chiku, by the prefectural road (Fig. 1).

Kou-chiku in which there are many buildings is 43,763m². The total floor space of these buildings is about 6,200m². Many Kinds of trees are planted around the buildings. Dominant trees in this area are phoenix tree, Japan pagoda tree, bull bay, tulip tree, plane tree, cryptomeria, pine tree, ginkgo, Himalayan cedar, white cedar, chestnut, hackberry nettle tree, kaki persimmon, hemlock, maple and shrubby althare et al. Various kinds of vegetables and pasture have been grown in the research field.

The area of Otsu-chiku is 71,440m² and the total floor space of main buildings in this area is about 4,700m². The paddock of goats and the botanical garden adjoin to the student dormitory. Many kinds of trees are planted in the botanical garden and its vicinity. There are trees such as cherry tree, Himalayan cedar, pine tree, maple, plane tree, poplar, elm, white cedar, cryptomeria, ginkgo, Japanese apricot, ilex, osmanthus, hiba arbor-vitae, chestnut and viburnum et al. in Otsu-chiku. The playground and the riding ground lie in Otsu-chiku.

2) The census was performed according to the belt transect method. The additional observations were irregularly done at the first opportunity. The total of the census and the additional observations numbered in 28 and 101, respectively.

3) The wild birds of 17 families and 28 species were observed in the campus. Eight species of eastern turtle dove, pied wagtail, brown-eared bulbul, tree sparrow, grey starling, azure-winged magpie, carrion crow and jungle crow were observed throughout the year. On the other hand, we could not watch bull-headed shrike, great tit, Siberian meadow bunting and Oriental greenfinch every month, though these were regarded as resident birds ordinarily.

4) The seasonal changes of number of brown-eared bulbul, tree sparrow and grey starling were investigated. Brown-eared bulbuls increased markedly from January to April and decreased rapidly in May. Grey starlings started increasing gradually in December and reached to the greatest number from March to May. This bird decreased suddenly in June. Tree sparrows were abundantly observed and their number changed only slightly during the year.